

# 右田毛利家庭園について

## 一 男爵毛利祥久の足跡

藤田 智 Fujita Satoshi

### はじめに

現存する右田毛利家庭園（御田屋庭園）について、大正九年（一九二〇）十一月十六日付『防長新聞』には、「男爵毛利祥久氏は十四日午後二時より二百餘名を招き本邸新築披露宴を催した 同邸は右田嶽山麓に位置し東北は石州街道を隔て矢苦嶽及び天神山を望み邸内の樹木は凡て泉水と共に古色を呈して」と記され、右田毛利家の栄華を今に伝える庭園を知ることができる。右田毛利家<sup>(1)</sup>に関する数少ない資料の中で、唯一『右田邑主 毛利内匠（藤内）小伝』<sup>(2)</sup>に、毛利内匠<sup>(3)</sup>について書いているが、男爵毛利祥久<sup>(4)</sup>については触れていない。『防府史料』<sup>(5)</sup>に御田屋庭園の写真が掲載されているが、説明等には史実と齟齬がある。そこで、筆者は、御田屋庭園の写真<sup>(6)</sup>の原板を入手し、精査した結果、写真の中の人物や撮影年代の特定ができた。ここでは、右田毛利家に伝わる大正八年（一九一九）二月一日から大正十一年（一九二二）十二月三十一日の「右田毛利家日誌」<sup>(7)</sup>の翻刻や右田毛利家

ゆかりの神社石柱と鳥居の撰書陰刻を解釈し、築庭について状況や男爵毛利祥久の足跡をさぐるものとする。

### 一 御田屋庭園写真について

#### (一) 写真の中の御田屋庭園

書院前には池が広がり、その手前にかなり大きい自然石の石橋が架かり、書院右手には六角型石燈籠と四角型九重層塔石燈籠がみられ、経年の雨水により苔などが付着して薄暗くみえる。対照的に崩れ石積や池の護岸などは色が白く見える。これは、石燈籠等が古物であるのに対して、崩れ石積や護岸の石は新たに山取されそのまま使用されたことを意味する。また、池周辺の下物などは小ぶりなものが多いが、対照的に南側は樹木の数も多く、高木が多い印象である。

#### (二) 写真の中の人物の特定と撮影年代

前述したように写真を精査した結果、写真左端の石橋後方には右田毛利家十三代男爵毛利祥久が写っている。書院の沓脱石付近に立つて

いるのは右田毛利家十四代毛利重雄<sup>(8)</sup>と華子夫人<sup>(9)</sup>であり、夫人に抱かれていたのは十五代祥允<sup>(10)</sup>である。祥久と重雄は袴をはいていることから祥允誕生の記念写真であろう。『防府市史』<sup>(11)</sup>には、御田屋庭園の写真が『防府史料』からの転載とされており、「昭和三十年ころの御田屋庭園」とあるが、祥允は昭和二年（一九二七）生誕でありこの写真は昭和二年頃に撮影されたものと考えられる。

### （三）火災前の庭園について

右田毛利家文書には「某屋敷図」<sup>(12)</sup>と「屋敷差図」<sup>(13)</sup>が残されている。「某屋敷図」には東側に門があり庭が北、南、西側と屋敷中（内庭）の四ヶ所に造られていた。後述する日誌には旧宅を全部焼失し、記録なども失ったとある。火災以前の屋敷の構成は不明であるため「某屋敷図」や「屋敷差図」と比較することは困難で、火災後の建物や庭園は大きく縮小されたものであると推測される。また「右田毛利家十二冊記録 御感元」<sup>(14)</sup>には、「一、御庭普請等終日相勤候時は中飯立被遺候事」「一、大工萩右田往来之時分」とあることからこの時代には庭普請人などの職人が萩屋敷と右田屋敷を往来して請負うものが少なくなかったようである。廃藩置県以後には近場の職人に管理させたものと推測される。

御田屋庭園写真からは、屋敷の再建直後の庭園の築造様々を知ることができ、また、祥久にとってこの写真は、四男の婚姻、孫の誕生などもあり右田毛利家の繁栄や次代への継承を願う一種の伝言ともとらえることができよう。



祥久 重雄、華子、祥允  
写真一 御田屋庭園（個人蔵）

## 二 日誌から知る庭園の一端

### (一) なぜ築庭は始まったのか

土井貞助らが書き残した大正八年(一九一九)二月一日から大正十一年(一九二〇)十二月三十一日までの「日誌」が現存する。右田毛利邸への人の出入りを主に記したもので、庭園については記してはいないが、ここでは、屋敷や庭園の築造にかかわる人々のことを知ることができるので、火災から三日間を原文翻刻して掲載し、四日以降は註後の表一に示す。

大正八年二月一日「本日午后十時頃御旧宅ヨリ発火、御旧宅全部并二諸記録其他備品不残焼失、此損譽價格約一万五六千円矣二終生ノ壞事ナリ、此日丁度陰曆元旦ニ相当セルヲ以テ各戸御酒ヲ頂キ早ク眠ニ就キシヲ以テ氣付ク事既ニ遅之消防夫の駆ケ付タル頃殆ソド全部ヲ嘗メ盡セリ、如何トモ為シ術ナカリキ只無念共涙ヲ吞、ニテ茫然自失、嗚呼漸ク午前二時頃鎮火セリ、消防隊ノ駆付ケシハ本村第一第二第三第四第七并二公設消防隊ハ申スニ及バズ、防府町第一支部小野村鈴屋直尾ノ九組ナリキ」

二月二日「本日午前九時頃ヨリ上右田戸主会員及第七区民軍人団第三班全部出邸、跡始末ノ為メ大々の活動ヲナセリ、午后五時頃大略始末ヲ付ケ終テ握リ飯酒ノ饗応ヲナシ午後六時過ぎ一同退散セリ、夫レヨリ幹部連二十余名ヲ招キ握リ飯及酒ヲ饗ビ午後十時頃漸ク退邸セリ」

二月三日「本日モ早朝ヨリ終日見舞者応接跡始末等ニ多忙ヲ極メ、

甲谷勤之進<sup>(15)</sup>藤井安熊両氏出邸手伝セリ一本日土肥ハ早朝ヨリ多々良御殿へ御見舞ノ御礼トメ参り候」などと火災直後の様子が記されている。

前記日誌によると、二月一日午後十時頃、旧宅より発火し、旧宅全部と記録などを焼失、翌午前二時頃鎮火した。二月一日は、旧正月にあたるため酒を頂いており火事に気付くのが遅れ、消防が駆け付けた頃には全て失われていた。二月二日は、午前から上右田の住民などが後始末を行い、握り飯と酒でもてなした。二月三日は、見舞い者への対応と後始末で多忙を極めた。土井貞助は、多々良公爵毛利家へ見舞いの礼に伺っており、火災直後の慌ただしい様子が窺える。

大正八年(一九一九)に起きた火災によって旧宅が全焼したため、屋敷の再建に取り掛かることが急務となった。そのため大正八年九月二十四日「上河原へ御引越之為メ荷仕舞及運搬ニ多忙」とあるように荷物を運び出し、大正八年(一九一九)十月十六日「原建築技師出邸」そこから原建築技師<sup>(16)</sup>により、再建計画が立てられた。そこで屋敷の再建と同時に旧宅跡地の一部に庭園を整備したものと考える。

### (二) 築庭師と植木屋と上司淵蔵

大正八年(一九一九)九月二十七日には「植木手入レ」とあり、植木屋が登場する。大正九年(一九二〇)三月十五日の上棟式後の二十六日に「築庭師木村由太郎出邸」、同年四月十八日には「木村由太郎及手傳一人下宿日雇四名手入共」、同年五月十四日には「築庭手傳一人植木買入之為山口へ帰ケリ」とある。築庭者木村由太郎という者の存在は確認できていないが、山口市から右田屋敷に下宿し築庭を行った庭

師達であることは推測できる。ではなぜ山口市の職人が出入りするに至ったかについては、上司淵蔵<sup>(17)</sup>が関係している。淵蔵の祖父主税から右田毛利家とは縁があり、藩老中益田越中、毛利内匠等の重臣より信頼を得ていた。また、毛利内匠らが発起人となり明治十年（一八七七）に開校した三田尻周陽学舎の校長に上司淵蔵が明治三十年（一八九七）就任している。明治三十三年（一九〇〇）「毛利家銅像建立事業」

<sup>(18)</sup>の委員長を務めており、亀山公園事業の庶務、建設、工事の委員長も兼ねていた。また、公爵毛利家からの信頼も厚く、多々良毛利本邸新築工事の築庭事務なども任されていた。亀山公園事業を赤井<sup>(19)</sup>（初代彌助）に紹介したのも上司である。赤井（株式会社広楽園）は、明治五年（一八七二）山口市で創業した造園会社で大正八年（一九一九）当時赤井には全国から修業に入る職人、流れの職人、夫婦で住込み働きするものまで含めて三十名程度の職人が出入りしていたとされており、その中の築庭を得意とする者達が、既に入入りしていた赤井の職人でもあった植木屋石田善太郎もしくは上司淵蔵を通じて右田毛利家庭園築庭に関わった可能性が高い。大正十年（一九二二）三月二十一日「植木屋石田善太郎外二名出邸」とあり、下宿とは記されていないことから地元の植木屋であると推測される。大正八年（一九一九）九月二十七日の「植木の入手し」はこの石田善太郎<sup>(20)</sup>とみるべきであろう。

### （三） 大正八年から十二年迄

日誌に登場するその他の人物や事柄についてまとめてみる。大正八年（一九一九）二月二十四日には徳山毛利家<sup>(21)</sup>御見舞とある。大正八年

二月四日「大工四名工事二当タル」大工は、佐々木房吉、息子の定吉他で火災から三日目には作業に従事している。大正八年（一九一九）

「大工左官出邸」の左官は、国本延太郎であり大正八年には出入りしているが国本の名前は確認できなかった。大正八年（一九一九）十一月十四日「色三石月や原田宇吉」とある。原田宇吉とは右田村の石工である。大正五年（一九一六）完成の多々良毛利本邸新築工事の石工や大正七年（一九一八）松崎神社石柱、大正十一年（一九二二）山口市御茶屋橋の架換え<sup>(22)</sup>や下右田の剣神社には大正十五年（一九二六）建立の円石柱一対が石工原田宇吉の名で残されている。日誌によると、大正十年（一九二二）九月十二日に原田宇吉外一名及手傳三名が御馬場修繕を行っている。この馬場とは「上右田村荒図」<sup>(23)</sup>にある杉馬場であり当時まだ残されていたことがわかる。大正八年（一九一九）十月十六日「原建築技師出邸」とある。原技師とは、大正五年（一九一六）十月完成の多々良公爵毛利本邸新築工事にも技師として携わる。大正九年（一九二〇）五月六日「岡田及石丸両人山口ヨリ植木持帰り之為メ車カヲ以テ参リ」の岡田<sup>(24)</sup>とは、防府市平和町の岡田造園初代で明治三十二年（一八九九）生まれの房一である。石丸<sup>(25)</sup>とは、防府市上右田の石丸造園の初代と思われる。この岡田と石丸両人が赤井と関係のある職人と共に築庭に携わっていたのである。大正九年（一九二〇）七月二十八日「表具師後藤出邸」の後藤は確認できない。大正九年（一九二〇）十一月一日「田中柏蔭代理御禮ノ為メ出邸」の田中柏蔭<sup>(26)</sup>とは、右田に居を構え山水画を得意とした画家である。大正十年（一九二二）一月十四日「山田邸上棟式」の山田家<sup>(27)</sup>とは、右田毛利家の隣地に移

住した親族である。大正十年(一九二二)三月八日「内田医師同道ニテ出邸」の内田医師とは内田小弥太<sup>(28)</sup>という佐波郡右田村の開業医で、右田屋敷に出入りしていることが残されている。写真一は昭和四年(一九二九)三月に「三田尻高等女学校創立記念」<sup>(29)</sup>で撮影された写真である。そこには毛利祥久、田中柏陰、内田小弥太などが写っている。学校設立のため委員代表には名門名士の参加が必要との観点から毛利祥久と田中柏陰に懇請している。この祥久と柏陰の両氏を取り持ったとされるのが内田小弥太である。<sup>(30)</sup>

大正十年(一九二二)九月三日「京都表具師等出邸」とあり大正十一年(一九二二)三月十日「京都表具師横井秀次郎出邸」表具代ヲ頂キタリ」とあり京都の表具師が請け負っている。大正十年(一九二二)十月三十日「山口木梨様御上様代理ノ為出邸」の木梨とは齋藤理、渡部史之論文<sup>(31)</sup>に詳しく述べられているが、祥久の子亀亮は明治三十五(一九〇二)三月二十日養子願いが出されており男爵木梨精一朗の養子になっている。近年、祥久以降の書簡数枚が発見され、中には木梨亮一から祥久に宛てた病臥見舞いも含まれており、孫の手紙を大事に保管していたのである。<sup>(32)</sup> 大正十一年(一九二二)十月五日「画家岡邨雪畝伺候」の画家岡邨雪畝<sup>(33)</sup>についての資料は確認できなかったが、一枚の絵が残されていた。

#### (四) 築庭材料から庭園を考える

「日誌」には、池の護岸や崩れ石積で使用されている石材、樹木などの詳細は記されていないが、毛利家の事例をもとに比較考察する。まず、石材では『公爵毛利家防府邸新築竣成報告書』<sup>(34)</sup>によると「一

各所据付アル大野面石・飛石共総テ御所有地山林内ヨリ運搬使用ス」とあり、石燈籠や石橋などの石造物以外の石材は裏山から採取するということである。右田毛利家臣であった桂家<sup>(35)</sup>の「月の桂の庭」においては、福田和彦<sup>(36)</sup>が「石材は右田ヶ嶽の山中から産出する岩石を用いている。白砂もおなじ山砂である」としていることから右田毛利家において裏山の石材(花崗岩)を使用したものと考えるのが妥当であろう。

樹木においては、大正九年(一九二〇)四月二十九日「木村植木買入ノ為メ廣嶋へ出浮タリ」三十日「木村帰邸」これは当時植木の買付け地として主に広島であったのだろうか。『公爵毛利家防府邸新築竣成報告書』内で、「一楓及ヒツツジ・玉ヒバノ類ハ苗木ヲ購入、構内耕地ニテ培養シ植付ケ、檜及ヒ縦ノ類ハ山口町香山園山林内ヨリ移植ス」とある。日誌の中で、築庭師 木村由太郎が広島へ買付けに出向いていることや手傳が山口へも出かけ植木を持ち帰っていることで一部の樹木は購入しその他中木などは裏山から採取したものと推測できる。



内田小弥太 田中柏陰 毛利祥久

写真二 三田尻高等女学校創立記念写真（個人蔵）

大正九年（一九二〇）六月十一日「築庭跡片付岡田外一人」とあることから、築庭工事が概ね完了したと思われる。この築庭工事は、大正九年（一九二〇）四月十三日から同年六月十一日ごろ迄で関わった人数は日誌から割り出し延べ二二〇人位であった。そして、大正九年（一九二〇）十一月十四日「園遊会百七十八名軍人官吏神職」で屋敷と庭園が披露されている。

### 三 祥久の撰書陰刻

防府市牟礼にある春日神社<sup>(37)</sup>には、大正九年（一九二〇）祥久揮毫による一对の石柱と大正十三年（一九二四）建立の「昇格記念」碑、昭和五年（一九三〇）祥久の書が陰刻された鳥居が残されている。右田毛利家四代就信<sup>(38)</sup>は、寛文五年（一六六五）鳥居を寄進し寛文七年（一六六七）社殿を再建し鳥居には「武門繁榮 邦国交泰」と撰書している。そこで祥久揮毫の漢文を解釈し大正九年（一九二〇）と昭和五年（一九三〇）を比較する。大正九年（一九二〇）建立の石柱一对には、「五典惟秩・三德惟致」とあり「五典惟秩」（父の義、母の慈、兄の友、弟の恭、子の孝という順序を守るべき）、「三德惟致」（智、仁、勇は持つべき）である。昭和五年（一九三〇）建立の第一鳥居には、「天地交泰・禎符咸臻」とあり「天地交泰」（陰陽の融和が大切）、「禎符咸臻」（吉兆や良いことがみな集まってくる）となる。大正九年（一九二〇）と昭和五年（一九三〇）の火災直後と時間経過した後では漢文の撰書に明らかな変化をみられる。そこには大正八年（一九一九）の火災から屋敷と庭園を完成させ、次代重雄と華子の婚礼と孫祥允の誕生で末代安堵の胸中を窺い知ることができる。祥久は、内匠が開設した「移風義塾」<sup>(39)</sup>の校長を受け継ぐほか、禅学講話会への出席<sup>(40)</sup>など漢籍の講究に熱心であった。春日神社にて漢文を残すということは、社殿の再建を行った就信をリスベクトしながらも右田毛利家と春日神社の相補的關係と牟礼村、右田村そして防府町の包括的關係を願ってのメッセージが込められているとみられる。

## おわりに

本稿は、昭和二年（一九二七）に撮影された火災後再建された右田毛利家御田屋屋敷と庭園の写真の年代を特定し、写真のなかの庭園や人物等の解説を試みた。さらに、火災直後の屋敷と庭園の復興期に書かれた「日誌」や当主男爵毛利祥久揮毫の春日神社の陰刻漢文などを通して、祥久の人柄が様々な人呼び寄せ、屋敷と築庭の完成へと結びつける足跡を迎えることができた。華族としての体裁を保ちながら生き抜いてきた祥久にとっては、屋敷の再建や庭園築造、右田毛利家の復興を成し遂げ、四男の婚姻、孫祥允誕生と右田毛利家の繁栄の継続と次代への継承を願う伝言が昭和二年に撮影させた写真に込められているようにもみえる。

本稿執筆に際し、防府市文化スポーツ観光交流部 文化振興課 文化財室 調査係 鞆雅子氏には、教授頂き感謝申し上げます。

## 〔註〕

新戦争長州軍総大将』伊都大学出版部 平成二十五年（二〇一三）三月

3 | 毛利親信（もうりちかのぶ）常太郎 内匠、藤内 男爵 嘉永二年（一

八四九）、長州藩土村上惟庸（むらかみ、これつね）の長男として生まれる。

慶応四年（一八六八）鳥羽・伏見の戦いに参加し勝利を収める。北越戦争、

会津戦争にも参加して戦功を立てる。明治十一年（一八七八）第百十国立

銀行創業に当たり、頭取を命ぜられる。明治十八年（一八八五）五月に死

去。御園生翁甫 『山口県右田村史』 昭和二十九年（一九五四）

4 | 毛利祥久（もうりよしひさ）男爵 安政七年万延元年（一八六〇）三月

生まれ明治四年右田領主毛利内匠の養子となる。第百十国立銀行の取締役

明治二十年（一八八七）十一月、「取締役毛利祥久 支配人草刈隆一の名義

をもって愛知県の三河千拓（毛利新田）の築立に着手したが明治二十五年

（一八九二）に暴風雨により堤防が破壊、浸水で多くの死亡者が出たことで

遂に開発を断念した。『山口銀行史』 明治三十年（一八九七）十月授爵

通知 明治三十年（一八九七）十月列華族通知 明治三十九年（一九〇

六）金村伝達書昭和十六年（一九四一）十二月死去。

5 | 防府史料保存会 『防府史料』第八輯 昭和三十九年（一九六四）一月

6 | 『防府史料』第八輯（御田屋庭園写真）令和四年（二〇二二）に筆者が所

有者個人から原板をお借りし、拡大コピーしたものである。

7 | 「日誌」（右田毛利家文書）毛利家務所 武田版 土井貞助、三保貞三、

岡本絢甫らが書き残した大正八年（一九一九）二月一日から大正十一年

（一九二二）十二月三十一日までの日誌である。（山口県文書館蔵）

1 | 防府市『防府市史 通史二 近世』平成十一年（一九九〇）三月 寛永二

年一代元俱は藩内の領地替えにより三丘から佐波郡右田に移り一万三千

石を領することになる。右田に本拠を置いたため右田毛利と呼ばれた。

2 | 野方春人 右田邑主 毛利内匠（藤内）小伝 改訂版 長州藩家老・維

8 | 毛利重雄（もうりしげお）男爵 明治三十四年（一九〇一）生まれ 松崎

神社宮司や三田尻女子高等学校第三代設立者代表 昭和四十八年(一九七三)死去。

9 | 毛利華子(もうりはな) 明治三十八年(一九〇五)生まれ 男爵四條隆英の二女 昭和五十八年(一九八三)死去。

10 | 毛利祥允(もうりしょうすけ) 昭和二年(一九二七)生まれ 三田尻女子高等学校第七代育友会長 平成十三年(二〇〇二)死去。

11 | 防府市教育委員会『防府市史 通史口 近世編』平成十年(一九九八)

12 | 「某屋敷図」(右田毛利家文書一六一六) (山口県文書館蔵)

13 | 「屋敷差図」(右田毛利家文書一四九) (山口県文書館蔵)

14 | 「右田毛利家十二冊記録 御蔵元」(山口県文書館蔵) 「右田の領主、長州藩一門家老右田毛利家の領政百般の故事先例や、処務の準拠となる事項を御蔵元役所で集成したものであって、十二冊から成るによって十二冊記録と題されている。原本は右田毛利家の旧蔵であって、現今山口県文書館に収蔵されている」(防府史料 第八輯)

15 | 甲谷勤之進 右田毛利家臣に甲谷俊家(右田村史)の子孫であるかは不明。

16 | 山口県文化財愛護協会『山口県文化財 四十二 特集 山口県近代和風建築総合調査』福田東亜 原竹三郎は毛利家防府邸の設計者であり明治四十年に北沢虎造により、井上馨に推挙された人物である。明治三十年代には、公爵毛利家の分家長防府毛利邸も設計に従事した。原は技師兼工務課長に任命され以後この本邸完成まで技術面における指揮をとることとなった。山口県教育委員会『山口県の近代和風建築』山口県近代和風建築総合調査報告書 平成二十三年(二〇一一) 福田東亜が詳しく記し

ている。

17 | 上司淵藏 来栖守衛『上司先生傳記資料』昭和六年(一九三二)五月 嘉永二年(一八四九)佐波郡(現防府市) 富市で生まれ、「毛利家銅像建立事業」において委員長を発起から落成まで十二年勤め最後は庶務に居りて工事を兼っていた。香山園廟所 豊栄野田神社、高田公園等の工事にも携わる。明治四十年(一九〇七)十一月から明治四十一年(一九〇八)三月迄、多々良毛利邸にて元昭と和歌を吟じるなど、公爵毛利家とも交流を深めていた。(続防府市史)

18 | 山口市役所『山口市史』昭和五十七年(一九八二)二月 明治二十五年(一八九二)十一月に起工式を挙げ同三十三年(一九〇〇)四月に完成し除幕式を挙行した。

19 | 山口市中央の造園業 株式会社広楽園は明治五年(一八七二)植木商及び造園業「他力園」として創業 明治三十三年「毛利家銅像建立事業」を手始めに 県内の工事に携わる。(株式会社広楽園 赤井哲春氏より聞き取り)

20 | 石田善太郎 山口市の造園業赤井(株式会社広楽園)の創業者赤井彌助代の職人で赤井と共に山口へ移住した後、赤井を離れ明治四十年現在地である防府市国分寺町で造園業石田植木を始めた。(株)インダ 石田泰彦氏より聞き取り)

21 | 石工原田宇吉『防長新聞』大正十一年(一九二二)九月二十三日付「御茶屋橋の架換 山口町中河原御茶屋橋の架換を二千六百七十圍で落札したとあるが、現在の橋はコンクリート製で昭和三十九年十二月竣工である。



22 | 徳山市役所『徳山市史料』昭和三十九年(一九六四)十一月 徳山毛利

氏の始祖就隆は毛利輝元の二男である。元和三年兄秀就から都濃群内に  
て高三万石の地を分封され、同七年その半数の換地が行われた。寛永十  
一年幕府から諸侯の認可をうけたが、正徳六年(享保元年) 宗藩と紛争  
を生じて改易、享保四年再興した。天保七年城主格となり、明治四年六  
月薩摩藩に先だつて宗藩に合併した。大正五年(一九一六)三月二十四  
日付『防長新聞』には、「徳山毛利家新邸焼く」とある。前年の大正四  
年(一九一五)春からの新築工事中の火災で土蔵二棟書院一棟以外を消失  
したものである。新築工事を請け負っていたのは東京の手塚兼吉であつ  
た。徳山毛利家火災の記事について防長新聞が二回に分けて載せている  
が、右田毛利家については火災そのものの記事は確認できない。

23 | 山口県立山口図書館『防長風土注進案』昭和三十九年(一九六四)五月

24 | 岡田造園(株)岡田造園 松本孝子氏より聞き取り)

25 | 石丸造園 二代目石丸幸男が平成十六年(二〇〇四)亡くなり廃業した。

26 | 田中柏陰 慶応二年(一八六六) 静岡で生まれ京都の田能村直人に師事

その後佐波郡右田村の田中家の婿養子となり京都と右田に画塾を設け後  
進を育てた人物である。昭和九年(一九三四)静岡で死去。(続防府市史)

(右田村史) (ふるさと読本右田)

27 | 山田家十五代十六代頃に毛利家寄組となり、その後給領地小鯖の領主に  
なる山田保助と祥久の長女との婚姻により現在地に移住した。(山田琢  
氏より聞き取り)

28 | 内田小弥太の診療所については、『防長新聞』大正四年(一九一五)五月  
二十九日付・「内田医院落成式 二十四日〜四日間落成披露」に毛利

祥久など五十名が招待されたとある。この診療所の建物は現在も上右田  
の同場所に残されている。

29 | 学校法人三田尻女子高等学校『写真でたどる三田尻女子高等学校のあゆ  
み』平成十四年(二〇〇二)九月 大正十五年(一九二六)米沢菊五郎によ  
つて「三田尻徳等女学校」として創設されるが、昭和二十三年(一九四八)  
四月より校名を「三田尻女子高等女学校」に改称した。

30 | 前掲註二十九『写真でたどる三田尻女子高等学校のあゆみ』平成十四年  
(二〇〇二)九月

31 | 齊藤理・渡部史之「地域文化財からみた木梨精一郎」山口県立大学術  
情報 第十号(国際文化学部紀要 通巻第二十三号)二〇一七年一月

32 | 「木梨家文書」一五六 養子願 毛利祥久二男 (山口県文書館蔵)  
「木梨亮一より毛利祥久への書簡」(個人蔵)

(本文)

謹啓 平素は御無音に

打過ぎ誠に申訳け

無之候

さて承り候へば御祖父様には

今月に入り御病臥との

御事御心配致し居り候

其後御容体如何に

御座候や御伺ひ申上げ候

何卒御加養專一に

御全癒の程を暮々も

祈り上げ候

先は取敢ず書面にて

御見舞申上げ候

敬負

十一月二十一日

木梨亮一

毛利祥久様

33 | 岡邸書歌（おかむらせつぽつ）『美術画報』十九編巻一 一九〇四年四月五日『夏の果物』の題で作品が残されている。（東京文化財研究所『美術画報』所載データベース）

34 | 防府市立防府図書館『防府史料 第六十二集 大正五年 公爵毛利家防府邸新築竣成報告書』平成二十五年（二〇一三）三月

35 | 右田地区教育会『心るさと読本 右田』平成十二年（二〇〇〇）十月 桂家は、代々右田毛利家の家老職を務めた家柄で、庭は「月の桂の庭」と呼ばれている。桂家文書によると、正徳二年（一七二二）四代桂運平忠晴が旧宅を解体して新居を建てているが、築庭もこのとき行われたものと思われる。

36 | 福田和彦『日本の庭』河出書房新社 昭和三十七年（一九六二）

37 | 山口県神社庁『山口県神社誌』昭和四十七年（一九七二）二月 王朝時代藤原氏国司として下向のとき南都春日神社の分霊を奉斎し、のち文治二年（一一八六）俊兼坊重源周防国司兼造東大寺使として、下向し牟礼一郷に南都の粧を迂し再建す。

38 | 毛利就信（もうりなりのぶ）寛永三年生（一六二六）まれ 就信は、子の

定道が早死した成果神仏を崇拝した。貞享二年（一六八五）阿弥陀寺山門建造、寛文七年（一六六七）春日神社再建、元禄十三年（一七〇〇）右田海宝寺の薬師堂建造、元禄十五年（一七〇二）熊野権現社再建、元禄十六年（一七〇三）死去。（防府市史 通史Ⅱ 近世編）

39 | 明治十五年十月に毛利藤内が右田邸内に開設した「移風藝塾」を明治二十一年に祥久が閉鎖している。（右田村沿革）

40 | 『防長新聞』大正四年（一九一五）五月六日付 右田村太平寺では右田村有志者の組織する「禅学講話会」が開かれ、祥久も講演会員として参加している。

表1 「日誌」二月四日以降

和暦	西暦	月	日	事項
大正8	1919	2	4	大工四名工事二当タル
大正8	1919	2	6	大工左官出邸
大正8	1919	2	9	焼木始末
大正8	1919	2	24	徳山毛利家見舞
大正8	1919	8	13	石垣組代為メ宇吉倅及日雇四名出邸
大正8	1919	8	29	重雄様英子様富海御別荘ヨリ御帰邸
大正8	1919	9	23	大工出邸小屋掛二取り掛リタリ
大正8	1919	9	24	上河原へ御引越之為メ荷仕舞及運搬ニ多忙
大正8	1919	9	27	植木手入シ
大正8	1919	10	16	原建築技師出邸
大正8	1919	10	21	左官及ビ植木屋出邸左官延ビ田中技師出邸
大正8	1919	10	22	菊鉢植ヲ山田邸へ移轉 植木屋二名出邸
大正8	1919	10	23	菊鉢植前日残余ヲ移轉 植木屋二名出邸
大正8	1919	10	24	植木屋二名出邸
大正8	1919	10	25	大工房吉出邸 (三日間)
大正8	1919	11	14	色三右月原田宇吉之夕折リケリ
大正9	1920	3	15	上棟式
大正9	1920	3	26	築庭師木村由太郎出邸
大正9	1920	4	13	本日ヨリ木村由太郎外三名出邸
大正9	1920	4	18	木村由太郎及手傳一人下宿日雇四名手入共
大正9	1920	4	19	築庭日雇平口外四名
大正9	1920	4	29	木村植木買入ノ為メ廣嶋へ出浮
大正9	1920	4	30	木村帰邸
大正9	1920	5	5	植木屋二人夕方ヨリ山口へ植木取入之為出浮タリ
大正9	1920	5	6	岡田及石丸兩人山口ヨリ植木持帰り之為メ車カヲ以テ参リ
大正9	1920	5	8	木村由太郎植木買入ノ為出浮タリ
大正9	1920	5	14	築庭手傳一人植木買入ノ為山口へ帰ケリ
大正9	1920	6	11	築庭跡片岡田外一人
大正9	1920	7	28	表具師後藤出邸
大正9	1920	10	13	築庭師木村外二名出邸
大正9	1920	11	14	園遊会百七八十名軍人官吏神職
大正9	1920	11	16	田中柏蔭代理御禮ノ為メ出邸
大正10	1921	1	14	山田邸上棟式
大正10	1921	3	8	内田医師同道ニテ出邸
大正10	1921	3	21	植木屋石田善太郎外一名出邸 (三日間)
大正10	1921	3	26	御門内榎垣御植替
大正10	1921	4	4	井上峯三某他男女八名松苗植付ノ為出邸
大正10	1921	7	1	左官延太郎出邸
大正10	1921	8	18	植木屋石田出邸
大正10	1921	9	3	京都表具師等出邸
大正10	1921	9	5	大工房吉出邸山田邸修繕
大正10	1921	9	10	御植木手入ノ為石田善太郎外二名出邸

和暦	西暦	月	日	事項
大正 10	1921	9	12	原田宇吉外一名及手傳三名出邸御馬場修繕
大正 10	1921	9	16	植木屋三名出邸（二日間）
大正 10	1921	9	18	植木屋三名出邸（十日間）左官国本延太郎出邸
大正 10	1921	9	28	左官延太郎手傳文一出邸
大正 10	1921	10	12	植木屋石田善太郎外二名出邸（三日間）
大正 10	1921	10	19	大工佐々木ノ弟子出邸
大正 10	1921	10	30	山口木梨様御上様代理ノ為出邸植木屋石田善太郎計算之為メ出邸
大正 11	1922	3	8	内田医師出邸
大正 11	1922	3	10	京都表具師横井秀次郎出邸シ表具代ヲ頂キタリ
大正 11	1922	6	20	石工原田出邸井戸修繕
大正 11	1922	6	21	石工原田外一名出邸（三日間）
大正 11	1922	7	7	大工佐々木出邸
大正 11	1922	7	23	大工佐々木房吉鶏固屋改築出邸（九日間）
大正 11	1922	8	10	佐々木定吉息子出邸作事アリ
大正 11	1922	8	25	水道修繕ノ為佐々木定吉及房吉出邸
大正 11	1922	9	10	石工原田御馬場修繕工事ヲ初ム
大正 11	1922	9	21	植木屋石田善太郎外二名出邸摘込ヲ為セリ石工原田宇吉私用出邸
大正 11	1922	10	5	画家岡邨雪畝伺候